

## 第2回 町田市特別支援教育推進計画検討委員会 議事概要

日 時 2023年8月18日(金) 15:00～16:30

場 所 教育センター4階 会議室

出席委員 永井晋(委員長)、前川圭一郎(副委員長)、福田秀樹委員、都丸文子委員、米山美佳委員、高橋圭子委員、早坂悦子委員、吉浦和幸委員、金子彦和委員、大坪直之委員、江成裕司委員、末原久志委員、横山隆章委員、鈴木和宏委員、丸節子委員

欠席委員 三浦昭広委員、松山康成委員、菅原一子委員、福島千尋委員、大山聡委員

事務局 学校教育センター 柴田係長、荒木主任、津田主任、  
辻就学相談アドバイザー

### 会議内容

1. 開会 教育センター長挨拶
2. 検討
  - ・第3期町田市特別支援教育推進計画について
  - ・町田市特別支援教育ハンドブックについて
3. 事務連絡 閉会

### 資料

- ・資料1 第3期町田市特別支援教育推進計画(案)
- ・資料2 町田市特別支援教育ハンドブック(案)

=====

### 1. 開会 教育センター長挨拶

【大要】本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。  
前回委員会で設置について承認いただいた推進計画作業部会、ハンドブック作業部会について策定作業を進めています。今回は第3期計画における具体的取り組みについて、及び町田市特別支援教育ハンドブックについてご検討頂きたいと思っております。

### 委員自己紹介、事務局紹介

(委員自己紹介)

(事務局紹介)

## 2. 検討

### (1) 第3期町田市特別支援教育推進計画(案)について

#### 【資料説明(資料1)】

委員長：今日ご意見を頂きたいのは、第3章「第3期計画の主な取り組み」を中心にご意見をいただき、その後全体を通してのご意見を伺いたいと思います。

委員：幼稚園の立場からの意見になりますが、これは小学校以降の問題で、特別支援教育の現場ではいろいろなことが変わってきているなど実感しています。幼稚園・保育園は以前から1歳から特別な支援が必要なお子さんとお親を支えています。学校体制のように幼稚園・保育園がまとまって特別支援に対して発言しようという状況ではありませんが、個々の幼稚園が連携し、特別支援教育の研修を行っています。今年の参加人数は165名おり、関心の高さが伺えます。しかし幼稚園・保育園から小学校への連携ができていない現状があります。1985年には小学校・幼稚園・保育園・子ども発達センターと養護学校が連携して小・幼・保・養護学校生涯教育連絡協議会が発足し、現場の教職員の研修と交流の貴重な場となり、2006年まで21年間続きました。この間は各機関との連携がうまく行われていました。この協議会が終了した後に、連携の場を設けるように何度も打診してきましたが、実現していません。子どもたちにとって小学校生活がスムーズにスタートできる土台になると思うので、どうかそういった連携の機会を設けて貰えると嬉しいです。

委員：現在も連絡協議会を小学校で実施していますが、以前と違う内容で行われています。各幼稚園・保育園では子どもたちが集団生活を行う中で親に認めて貰うのに苦心しています。発達についてのアドバイスを受けてもそれを就学にあたってどう準備をしていけばいいのか、どういった支援をすればいいのか、現場は試行錯誤しています。特に特別支援教育の充実においては、現場の研修だけでなく、その前後への研修も必要となります。保育園での成長を小学校にきちんとつなげるためにも、1年に数日でもいいので、小学校の先生に保育園に来て頂いて肌で感じてもらうような研修が必要だと思います。

委員長：今のご意見は特別支援教育の充実、教育研修に関わるどころと基本方針目標4の「切れ目のない支援を行う関係機関との連携」に関わるどころだと思います。小学校では1年生がクラス分けが一番悩んでいます。自治体によっては、1学期のクラスは一時的なクラスにしておいて、2学期が始まる際にもう一度クラス替えをし、正式なクラスとするところもあるそうです。子どもたち一人ひとりに合った環境を整備するために、そういった対応をせざるを得ないほど、小学校1年生となる子どもたちの実態を共有できていないのだと思います。どの小学校でも特別支援に関わらず、幼稚園・保育園の子供達の実態を知りたいがっています。近年はコロナにより連携ができていませんでしたが、

幼保小連携という仕組みは残っているので、全てとなると難しいかもしれませんが、小学校については今年度から復活させ、現場の幼稚園・保育園の先生から直接話を聞く機会を設けたいと思っています。

委員：関係者会議充実という取り組みで、連絡協議会での連絡方法について、コロナ後の連絡方法も示して頂けると安心すると思います。

副委員長：移行支援として体験授業を開催し、園の先生と連携しながらどんな配慮が必要なのか、お子さんの特性に合ったクラスをみている自治体もあります。また、切れ目のない支援ということでは、就学前の例えば1歳半健診や3歳児健診で子ども支援センターとの具体的な連携方法はどうなっているのか、また、行政が縦割りになってしまうがちであるため、教育委員会と子ども関係の部署との間でこういった情報のやりとりがあるのか興味があります。さらに特別支援教育は通常教育の中に組み込まれたものになっているので、指導課とポジティブな連携になっている事を期待しています。

委員：コロナ前に各学校の先生と保育園・幼稚園の集いがありましたが、再度実施させるのであれば、一同開催ではなく、分散開催をしていただくことを希望します。一つの学校と話していたら、もう一つの学校の先生が帰ってしまったということもありました。

委員：「特別支援教育推進モデル校」指定について、なぜ消えているのか、経緯を教えてください。

委員：実施は継続していますが、資料から抜けてしまっていました。そのため、基本目標1の取り組みに追加させていただきます。

委員：特別支援教育の研修の工程表で、前回あった特別支援教室専門員の研修スケジュールが今回、記載されておりませんが、今後は実施されないのでしょうか。

委員：基本目標1（1）に追記させていただきます。

委員：「全ての教員が適切な支援が出来るように・・・町田市特別支援教育ハンドブックの作成と活用」について、これまでハンドブックの認知、活用は現場ではできていなかったと思います。そこについて全ての教員が手にとれるような対策を取って頂きたいことと、4年ごとの一括配布では次年度に異動してきた教員は手に取ることができず、存在自体を知らないままとなってしまう可能性もある。このハンドブックをデータで各現場に配布し、異動してきた教員にその都度、渡すようにすれば、予算もかからず、各教員も活用していきやすいのではないかと考えますので、ご検討ください。

委員長：全体についてご意見はないでしょうか。

委員：「はじめに」では、今回計画で新規に始めたことや前回との相違点などを記載するところなので、助詞の使い方や表現の仕方を吟味するべきだと思います。第2段落、町田市の現状に目を向けると、から始まる文章の文末、「教員の必要性が向上している」という表現はわかりづらく、「特別支援教育に対する学びの必要性が求められている」などの表現であれば分かりやすいかと思います。できればこの「はじめに」の中に計画の第2期と第3期の違いや、市としてどこに力を注いでいるのかといった文言を入れると、町田市の頑張りが伝わるとと思います。

## (2) 町田市特別支援教育ハンドブックについて

### 【資料説明（資料2）】

委員長：現場の教員にとっては、このハンドブックをすべて読みこむ時間は取れません。教員は集団の中で個人に配慮する必要に迫られた時に、その対応法等の情報を取り入れるわけですが、本質は誰にとっても判りやすい授業・教育を目指すことです。特別支援教育の手法を使って、個人にだけではなく、誰にとっても分かりやすい授業の手立てを考える事が一番大切だと考えます。私はそういった観点で教員にアドバイスや指導をしています。学校あるいは校長先生によっては違うかもしれません。これを読んだ学級担任・教科担任が理解をして、そこから自分でスタイルを変えていける様な冊子になれば一番いいと感じます。

委員：これまでのハンドブックは辞典のように活用できていますし、今回のものは各教員が壁に当たったときに活用できる物になっていると感じます。さらには個別にヒアリングしてそれが反映される様な形で、このままブラッシュアップしていただければより使いやすいものになると思います。

委員：必要な情報にすぐたどりつけるようにチャート表のようなものも有ると良いのではないのでしょうか。

委員：担任の先生が代わると、お子さんの状態が全く変わってしまうということがあります。教育の現場で何が起きているのか気になっているところです。上手く対応できた先生の体験談などがあれば若い先生にとっては学びとなるのではないのでしょうか。

委員長：特別な支援を必要とする児童の割合は8.8%とありますが、実際はその数字にとどまらず、どのクラスにも手を差し延べなければならない児童・生徒はこれ以上にいて、特別支援が必要ないクラスは存在しません。しかしこれを知っている教員と知らない教員では全く指導内容が変わってきてしまうので、これはとても意味のあるハンドブックだと思います。

ます。更にご意見をいただいてもっと充実したものにしていきたいと考えています。

委員：障がい者の施設で働いていた経験から、アセスメントを行い、個別支援計画を立てることもあります。その時に大事なのは問題行動ばかりに目を向けず、その人の強みや良さもアセスメントする事です。他者からは課題や問題行動だけが評価につながることもありますが、その人の良さが課題の突破口になることもあるので、そういう視点もどこかに入れてもらえるといいのではないかと思います。

副委員長：いろんな自治体を見る機会がありました。ある自治体ではハンドブックを保護者にも電子版で配っていて、そうすると教員は見ざるを得なくなります。現場では、教員だけでなく、親も一緒に支援していくこととなります。先生方は保護者とかこういう風に連携したいと考えているというのが見えると保護者は安心します。アセスメントとは本人のQOLを高めることが前提で、何のためにするのか、子どものQOLを高め、幸せになるためにどう環境を整えていけばいいのかがわかれば、安心して親御さんにとって心理的負担も大きい検査でも受けてみようという気になります。そういうことも含めて公開されるといいのではないかと思います。

### 3. 事務連絡 閉会

委員：会議資料が1週間前に手元に届くように発送スケジュールの配慮をお願いします。